

# 大谷繞石の俳句観

——西洋からの示唆——

日野雅之

はじめに

今日、大谷繞石はハーンの紹介者としてのみ知られているに過ぎない。俳号の読み方すら、俳句辞典でもまちまちである。英文学者であり、また、俳人であった繞石は、俳人として、見過ごすことの出来ない重要な面を持っており、その経歴と俳句観を紹介してみたい。

正岡子規によって近代俳句が確立された頃の弟子として、高浜虚子、河東碧梧桐は多くの研究者によって著書、論文がなされている。他の弟子には今一つ光が当てられていない。明治二十九年十月、目黒不動境内で行われた子規派初の吟行会には十人の弟子が参加している。蕉門十哲になぞらえて子規門十哲と言つてよいだろう。まだ他にも子規の弟子はいたわけだから、子規門十哲は固定するわけにはいかないが、内藤鳴雪、坂本四方太、佐藤紅緑はその中に入るのであろう。吟行会に参加した一人、松江生まれの

大谷繞石の俳句観

俳人、大谷繞石も当然十哲に入るべき人物であろう。旧制松江中学でラフカディオ・ハーンと巡り会い、三高では高浜虚子、河東碧梧桐と巡り会い、その関係で正岡子規と出会った俳人である。英語教師仲間、俳人仲間として夏目漱石と知友となり、金沢四高教授時代には室生犀星を俳弟子としていたこともある。

大谷繞石は終始一貫、定型写生俳句を推し進めた俳人であり、碧梧桐らによって変調が流行していた明治四十年代も定型を崩そうとしなかつた姿勢は、今改めて再評価しなければならない俳人であり、その定型俳句の発表の場であつたホトトギス系の京都名門俳誌「戀葵」もまた再評価されなければならない。

## 一、大谷繞石の生い立ち

大谷繞石 略年譜

明治	暦	年齢	事	項
八年	〇	三月十二	酒造業、大谷善之助・タルの長男	

明治十三年	五	松江本町小学校に入學	として、松江市に出生。本名、正信。俳号の読みは「ぎようせき」。
明治二十年	十二	島根県尋常中学校に入學	
明治二十三年	十五	九月、島根県尋常中学校にラフカディオ・ハーンが英語教師として赴任、ハーン四十歳、親交を深める。	
明治二十四年	十六	十一月、ハーン、熊本五高へ、続石が生徒代表で送辞を述べる。	
明治二十五年	十七	七月、島根県尋常中学校を卒業。卒業生は十三名。九月、第三高等中学校豫科第一級に入學、高浜虚子、河東碧梧桐、阪本四方太と知友になる。	
明治二十七年	十九	學制改革で仙台の二高に転學。初の正岡子規選「鹿鳴いて杉の木高し東大寺」。	
明治二十九年	二一	七月、仙台の二高を卒業。九月、東京帝国大學文科大學英文学科入學、奇しくもハーンが英語主任教師として熊本五高から赴任。九日、ハーンの假寓を訪う。翌、十日、子規庵句会に初参加して子規と初対面、十月二十六日、子規らと東京目黒不動境内で十名の日本派(子規派)初の吟行会。この年、子規の二字評で「明快」と言われた。この年より、苦学生(実	

明治三十年	二二		家の酒造業(倒産)続石はハーンの日本文化資料収集係となり、毎月、報酬を受け、それを學資として卒業することが出来た。
明治三十二年	二四	七月十日、東京帝国大學文科大學卒業式、文科大學卒業生七五名、英文学科十三名。この年、下宿先、大河内家の長女、きく、と結婚。	八月、国内五番目の子規派句会碧雲会を松江に結成、続石の尽力による。
明治三十三年	二五		続石の代表句はこの年の作、「鹿笛の一つは谷へ下るらし」「泉水に舞くつる桜かな」。
明治三十四年	二六	一月、私立哲學館大學英語講師就任。	八月、真言宗東京高等中學林英語講師に就任、先輩、土井晚翠の紹介で私立中學都文館英語講師にも就任。
明治三十五年	二七	四月、淡路島の兵庫縣洲本中學校教諭として高給で迎えられる。教え子に高田蝶衣、大内兵衛。	八月、真言宗東京高等中學林英語講師に就任、先輩、土井晚翠の紹介で私立中學都文館英語講師にも就任。
明治三十六年	二八	九月十九日、正岡子規没。十一月、洲本中學校教諭を辞す。真宗大學教授就任。	八月、真言宗東京高等中學林英語講師に就任、先輩、土井晚翠の紹介で私立中學都文館英語講師にも就任。
		ハーン、東京帝大辞任。エマーソン「偉人論」翻訳出版。	

昭和	十八年	五八	二月、胃手術。十一月十七日、胃がんで没。
昭和	七年	五七	二月、廣島高等学校教授を辞す。
大正	十五年	五一	小泉八雲全集出版のための翻訳を始める。
大正	十三年	四九	三月、廣島高等学校教授就任。夫人の金沢の寒さと水害の苦勞のため。
大正	七年	四三	句集「落椿」出版。
大正	五年	四一	十二月、夏目漱石没、繞石が金沢から送った金沢名産「つくみの粕漬」が死亡の要因。
大正	元年	三七	十二月、「滯英二年案山子日記」出版。
明治四十五年		三七	二月、英国より帰国、四高にもとる。
明治四十二年		三四	九月、二年間の英国留学に出发、明治天皇拜謁の折りには漱石より燕尾服を拜借。
明治四十一年		三三	八月、金沢、四高教授就任。
明治三十九年		三一	「恵馬遜傑作集」翻訳出版。
明治三十八年		三十	四月、私立哲學館大學英語講師就任。俳誌「懸葵」の選者となる。夏目漱石と知友になる。
明治三十七年		二九	九月、ハーン没、家族と交際を再開。
			中央公論俳壇選者となる。

大谷繞石の俳句観

昭和十八年	墓は松江市寺町、恩敬寺。 きく夫人、広島より東京へ転居、書籍・短冊類、繞石の教え子の勤務する春陽堂へ預けるが空襲のためか、紛失、現在も古書店から蔵書が出てくる。
昭和二十八年	きく夫人、東京にて没。

二、大谷繞石の俳句

俳論「明治二十九年の俳句界」での子規の二字評、繞石の俳句は「明快」で、他の俳人では、漱石「活動」、碧梧桐「洗練」、虚子「縦横」、鳴雪「高華」などであった。そして「四方太繞石深く斯道に悟入する所あらんとす。」と評している。「明治三十年の俳句界」においては「碧梧桐、虚子、紅緑、露月、把栗、肋骨、四方太、秋竹、蒼苔、漱石、霽月、極堂、繞石等は俳人の錚々たる者なり。」と評している。明治三十年一月の新年句会の時に書いたもので、床の上に八百屋の店頭にある品物を置いて、それにそれぞれ註がしてあったものが、「発句經營論品」で「鳴雪君卵 滋養アリ 小供ニモ好カレル、漱石君 柿 ウマミ澤山 マダ澁ノヌケヌノモマジレリ、繞石君 慈姑 甘キ方ナリ 少シエグイ處アリ」等であった。

大谷繞石の俳句の句風は、初めの「明快」から、明治三十年代

の絶頂期には「温雅清新」の句風を確立した。「明治三十年代の俳人と位置づけることが出来るよう。

- 一つづ、島暮れて行く春の海  
明治二十八年
- 水早し翡翠とまる魚梁の杭  
明治二十九年
- 庵寺や野菊小さく暮るゝ秋  
明治二十九年
- 子規派初の吟行会一句（目黒不動境内）  
明治二十九年十月
- 石段や椎の実はらりはらり落つ  
野を焼て其夜静かに雨が降る  
鹿笛の一つは谷へ下るらし  
泉水に簞くづるる桜かな  
鳴きやむで雨となりけり猫の恋  
葉鶏頭雁渡ること頻りなり  
白梅に寺静かなり晝の月  
灯を消して梅の影見る障子かな  
七月卒業をふまえた珍しい一句  
残したる髭涼しさよ新学士  
草の戸や野分やんだる宵の月  
「赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり」の子規の明るさに対して  
繞石の閑寂の世界の一句  
赤蜻蛉東寺に夕日残りけり  
飯事の貝に汲む水温みけり  
美しき汗や舞子の舞ひ終へて  
熊野路と樹下の道標蟬時雨
- 明治三十年  
明治三十年  
明治三十年  
明治三十年  
明治三十二年  
明治三十二年  
明治三十三年  
明治三十七年  
明治三十八年  
明治三十八年  
明治三十八年  
明治四十二年  
明治四十二年  
大正 五年

八雲忌や供ふるものに虫籠も 昭和 五年

子規の弟子では時間的俳句が特徴の高浜虚子、印象明瞭の句が特色の河東碧梧桐、これらの二人はかなり研究されているが、他の近代俳句初期の俳人の研究は進んでいない。最近から総合俳誌「俳句」に神奈川大の復本一郎教授が「佐藤紅緑の眼」という連載を載せているのが注目される。佐藤紅緑は繞石の句友である。繞石の温雅な俳句に比して、紅緑の俳句は子規から「奇なる俳句」と評されている。

- 蟲籠に蟬を入れたる童かな 明治二十九年  
笹舟に毛蟲を流す童かな 明治二十九年  
秋の螢寂寞として光りけり 明治二十九年  
麥秋や犬にまたがる里童 明治二十九年

### 三、大谷繞石の俳句観

明治末期、河東碧梧桐が難解な新傾向俳句運動に走った時も、繞石は終始、定型写生俳句を追求した。明治二十九年にも日本派（子規派）の変調をただ一人で批判した。「帝国文学」明治二十九年十一月号に「俳壇近況」という題で、「新酒のみて酔ふべく我に頭痛あり 虚子」「大なる小なる案山子親子かも 碧梧桐」などの変調を批判した。

ホトトギス派の名門誌「懸葵」の主筆、大谷句仏（東本願寺第十二三世・本名・光演）は巻頭に「我は我」という題で、定型写

生句を発表して、新傾向俳句に対抗した。俳誌「懸葵」大正四年三月号の特集「現俳壇に対する批評及感想」で繞石は次のように述べている。

現俳壇に對する批評なんか到底力の及ばぬ事でありますから残念乍ら御斷り致します、まあ感想といったやうなことを申上げれば井泉水君一派の俳句は俳句で無いものへ發展したもので論外です、ホトトギス派(?)のはあまりに退嬰的に陳腐な嫌があります、碧梧桐門下の人の句には故意とひねくれたものや自分合點のものが多くて句意の了解されぬのが少ないのを遺憾とします。

阪本四方太

今の俳人は人格の修養が足りない。主張や作品が如何に立派に見えても人格が低くては駄目だ。根本問題を忘れてはいかん。人格が向上すれば自然、句に光が出る。句の巧拙などは第二の問題だ。藝術家を以て任ずる俳人は人格の修養を怠つてはならぬ。

近代俳句史に「懸葵」の見直しが必要であり、あわせて、繞石にも光を当てる必要がある。

口あいて落花ながむる子は仏 句佛

さて、繞石が定型写生俳句にこだわったのは何故か。伝統美を大切にす松江の育ちであることも一つの要因であろう。もう一つはハーン依頼の古典俳句調査である。ハーンの資料収集のため、伝統的な古典俳句を綿密に調べていたということ、子規も古

典俳句を調査して、これからの俳句の歩むべき道を探り、蕪村の再評価という発見をしたのであるが、繞石にとつても、ハーン依頼の古典俳句調査が、知らず知らず定型写生俳句を守ろうという繞石の俳句観を作りあげていたのではあるまいか。

さらに加えて、文人俳句としての立場がある。虚子や碧梧桐のように俳句を専門として、俳句と格闘するというのではなく、文人俳句という言葉があるが、側面から俳壇を眺めながら句作する文人俳句と同じ面を繞石も持っており、漱石と共通の面を持っている。つまり、英文学者としての面を持ちながら、側面から俳壇を眺めて句作するという立場である。俳壇を客観的に眺めることが出来るという利点があり、定型・写生を守るという警告も発しやすかったのではなからうか。そして、西洋人・ハーンからの定型の古典俳句の素晴らしさの示唆である。

#### 四、大谷繞石とハーン——西洋からの示唆——

最近のハーン研究によって、ハーン文学の背景に、少年時代を過ごしたアイルランドの文化があるのではないかと、ということが指摘されている。日本の幽霊とアイルランドの妖精、出雲の八百万の神々とアイルランドの多神教、水の都、松江とダブリン、余生を過ごしたいと言った隠岐の島と、湖と緑のアイルランドの片田舎、等々である。アイルランド文化と似た日本文化をハーンは愛した。日本文化を愛情を持って理解しようとしたのがハーンで

あり、友人であつた東京帝大のチェンバレン教授も俳句研究をしているが、客観的なものである。

日本文化を愛情を持って理解しようとした一つの例は、日本の古典音楽についてである。繞石の文章に述べられている。

二十三年九月の末頃なりしか、余は少しく唐楽を吹奏し得る為、一會を寺町なる某寺に催うし、未だ旅亭に居給ひし先生を招いて之を聴かしめ奉りしが、二時頃より日暮る、迄、先生は布團に端座し給ひし儘熱心に傾聴し給ひ、會終りて立ち上がり給ひし折にも痺を感じ給はざりしには驚きぬ。<sup>4)</sup>  
 繞石は雅楽の笙、<sup>しやう</sup>、<sup>びやう</sup>、<sup>ひやう</sup>を演奏出来た。ハーンもこの時のことと繞石の人柄について文章を残している。

大谷正信は滅多に來ないが、來る時はいつもひとりて來る。ほっそりとした、いくぶん女性的な顔立の美少年で、遠慮深く、物腰が落ち着いていて、洗練されている。真面目であまり笑顔は見せない。この少年の笑い声というのを聞いたことがない。大谷はクラスの一番となつたが、とくに頑張らずともそのまま一番でいそである。(中略) おおきなお祭りの日に正信一家はお寺で皇じよとか抜頭とかいいう不思議な曲を演奏する——はじめのうちは西洋人の耳には聞いても全然面白くもない。ところが何回も聞いているうちに味わいが次第にわかるようになる。いやそれどころか、日本古来の音楽にはそれなりの妖しいまでに美しい魅力があることがわかつてくる。正信が家に来るのはたいてい法会や祭りに私を招く

ためて、それが私の興味を惹くことを承知しているからである。<sup>5)</sup> 西洋人ハーンは俳句をどのように理解したのか。作品集に四、五ヶ所、俳句について述べている。その一つ、「怪談」の中の「蝶」で次のように述べている。

蝶を詠んだ発句の類題集はこの題目の審美的方面について、日本人がどのような関心を持つているか、ということ<sup>6)</sup>を説明するために役立つだろう。そのあるものは、一幅の絵、十七字に詠みこまれた小さな淡彩スケッチである。(線・筆者) またあるものは、いかにも気のきいたほんの軽い思ひつき、でなければ、風雅な暗示といった程度のものにすぎない。がほんの軽いものではあるが、諸君は、そうした詩句そのものには大して興味を持たれないかもしれない。エビグロム風な日本の短詩を味わう趣味は、まことに氣長に到達しなければならぬ。ならない趣味であつて、こういう作品の可能性を立派に評価できるためには、辛抱づよい研究のうちに、きわめて徐々になされなければならない。(線・筆者) 世には、たかがあんな十七字の詩のために、くそまじめな要求をするなどは、おこの沙汰の限りだと、せつかな評言を放つた人もある。ところが、なんぞ計らん、クラシヨーがカナの結婚の饗宴の奇蹟を詠んだあの名句はどうであらうか。

Nympha puica Deuna vidit ei enbit.

(内気なる仙女神見て顔染めぬ)

わずか十四綴音、しかも不朽の文字である。ところが、日本の十七字の詩は、これとまったく同じの、いや、もつと不思議な、もつと驚歎すべきことが、それも一度や二度ではないおそろく、千度もなされているのである。もつとも、次にあげる俳句は、文学的な理由から選択したものではないから、あまり驚歎するようなところはなにかもしれないが。

(筆者抄出) 釣鐘にとまりてねむる胡蝶かな 蕪村

蝶とんで風なき日とも見えざりき 暁台

睡じや生れかはらば野辺の蝶 一茶

撫子にてふてふ白し誰の魂 子規

ハーンの俳句の知識は、繞石から得たことは間違いない事実であり、高浜虚子の文章にも紹介されている。

その中の大谷繞石といふ男は、松江中學の出身でありましてこれは小泉八雲、即ちラフカディオ・ハーンの弟子でありました。中學生の時分には、八雲の家に、書生をしてをつた事があつたのであります。それで、後に八雲に俳句といふものを説明したのは、この繞石の力が多きにあつたのであります。(中略)

仙臺に居ることが僅かに二ヶ月位で、再び又碧梧桐と共に東京に出てきたのであります。

それより前に、仙臺に居る時分に、繞石と四方太の二人が下宿を訪ねてきて、僕等は改めて君達に入門するから、俳句を教へてくれないか、といふ事をいつて來ました。僕等が教へ

るといふわけにはいかないが、子規に紹介してやらう、といった、二人の句稿を子規に送りました。それが後年、繞石、四方

太の二人を俳界に活躍せしめた原因となつたのであります。<sup>(c)</sup>

八雲の家の書生云々は、西洋人の教え子であるという繞石の自慢話に、虚子が思ひ込んでしまつたものであろう。ハーンは俳句を完全に理解していたか、といへば、そうでもないようであり、ハーン自身も、「こうう作品の可能性を立派に評価できるためには、辛抱づよい研究」が必要であると言つている。

中世文学研究者で、「徒然草講話」の著書がある沼波武夫(埴音)氏は「帝國文學・小泉八雲氏記念號」で「俳句紹介者としての小泉八雲氏」と題して次のように述べている。

小泉先生は、あらゆる方面から日本を紹介されたが、その中で特に我々に目立つのは、俳句を親切に紹介されたことである。先生の著書中に紹介された日本の詩には、童謡もあり、情歌もあり、和歌もあり、神樂催馬樂まであるが、最多數なのは俳句である。先生は今までの西人中最もよく俳味を解した人であつた。苟くも俳句に興味を有つてゐる人は、これを大に世界に紹介された先生の勞を永く忘れてはならぬ。年々八雲忌を催してもよからうと思ふ。

先生が俳句に對しての見解は如何であるといふに、In G hostly Japan の俳句と和歌と一つにして論じてあるところに、

(句を數多擧げた次に) これ等は日本詩の特質なる「言つ

たきり」であつて、言外に言があるのである。十七シラブルまたは三十一シラブルの日本詩の意味を現すには、その倍の英字を以てしてもなほ足りない。これ等の詩は屏風や扇や盃に描いてある畫のやうに、自然より受けた感銘を再び呼び起したり、旅行又は巡拝中の幸福な出來事を想起させたり、美しい日の記憶を呼び出したりして快感を與へるのである。この明な事實が十分解れば、世界的の教育を受けて居るにもかゝらず、現在の日本人が古風な詩味を熱心に愛する事が理のある事だ、といふことが知れる。

といつてあり、(後略)

あゝこの親切な俳句の紹介者たる先生は、もうこの世には居られないのである。ああ嗚今頃は極樂の芳ばしい風に吹かれながら、俳諧先達 パシヨールや著名女詩人チヨと美しい俳話でも志て居られるでせう。

この文では俳句をよく理解した西洋人としてハーンを讀んでいるが、この点については反論もある。繞石は雑誌「英語青年」の中で「漱石先生」という項に漱石の俳句と西洋詩の比較を述べた文章を紹介しており、その中に次のような文章がある。

(ホトトギスに載せた漱石の隨筆『不言之言』の引用)『俳句に禪味あり。西詩に耶蘇味あり。故に俳句は淡泊なり。洒落なり。時に出世間的なり。西詩は濃厚なり。何處迄も人情を離れず。(後略)』

私も之には全くの同感同意である。「蜻蛉釣り今日は何處迄

行つたやら」の Arnold の譯は、甘く英詩にはなつて居るが蜻蛉釣の眞相は消えて居る、とも言はれて居る、誠にその通りで、西洋人の俳句譯は俳句の趣を全く失つて居るのが多い。西洋人は俳化が出来ないのであらう。小泉先生に隨分澤山俳句を解釋して上げたが、眞味は解されなかつた様である。(線・筆者) 日本人にしてからが、俳句が本當に味へぬ人で俳句を西洋へ紹介しようとして居る人を見受けるが、無効有害かと私は思つて居る。

外国人に何故俳句が理解されないのか、「俳句の國際性」を研究しておられる星野慎一氏の文章がある。漱石の俳句と西洋詩の比較に類似した内容である。

みづからを「無名の放浪者」と呼んだエルヴィン・ヤーン(筆者注・東大独文科教授・1890—1964)は、ドイツ語圏の俳句に正しい方向を与えた文学者として忘れえぬ人である。彼は『フランクフルター・アルゲマイネ』紙に寄稿した俳句論の末尾に、こうしるしている。

「眞実な俳句がヨーロッパで創作されるのは、むつかしいことである。その第一の理由は、日本古來からの俳諧詩人のやうに自然と密着した生き方をして居るヨーロッパ詩人は一人もいないからである。第二の理由は、俳句芸術は禪文化の根底から生れ出たものであるが、その禪的なあり方は、ヨーロッパ人には隔絶された世界だからである。」

きわめて平明な意見である。しかも、西洋と日本とのちがひ

の根底がはっきりと浮彫りにされている。この「彼らには隔絶された世界」に興味を持つことが、西洋の識者に新鮮な感覚を与えるのである。エルヴィン・ヤーンは、「ちか頃になつて（わび）や（さび）の意味もようやく理解できるようになつた。この概念も私たちにはきわめて現代的な意味を持っている」と述べたが、これらの言葉の持つ概念は俳句を好む西洋人にとつて根元的な重さを持つているので。（後略）

明治の日本在住の西洋人にとつて、俳句の理解は困難であつたかも知れない。しかし、日本の古典音楽を辛抱強く理解しようとするハーンの姿勢から見て、俳句についても、辛抱強く理解しようとしたであろうことがうかがわれる。俳句の知識をハーンに与えながら、繞石も逆に古典俳句の良さ、定型俳句の良さをハーンから示唆された可能性もある。

ハーンは、日本の学生に知識を与えることは出来ないが、「示唆を与える」ことは出来ると言っている。「私ができないのは、日本の歴史、あるいは何か特定の日本の主題について、権威者としてふるまうことです。私の講義の価値は示唆的であるということにつきます。事実の明確化にあるものではありません。」（「エリザベス・ピスランド宛書簡」）

繞石は、日本文化の資料をハーンに提供する作業を通じて、日本の伝統美を大切にしたいハーンから、逆に日本の伝統美の素晴らしさについて「示唆」を与えられていたのではなからうか。俳句についても、そう思えてならないのである。

#### 注

- (1) 「明治二十九年の俳句界」『子規全集』・第四巻・俳論俳話一・講談社刊・昭和五十年・十一月・五六八頁。
- (2) 「明治三〇年の俳句界」『子規全集』・第五巻・俳論俳話二・講談社刊・昭和五十一年・五月・十二頁。
- (3) 『子規全集』・第十二巻・隨筆二・講談社刊・昭和五十年・十月・六二七頁。
- (4) 大谷正信「松江時代の先生」『帝國文學』第十巻十一号・小泉八雲氏記念號・大日本圖書株式会社刊・一九〇四年・十一月・二十四頁。
- (5) 小泉八雲「英語教師の日記から」『明治日本の面影』・平川祐弘訳・講談社學術文庫・講談社刊・一九九〇年十月十日・五六頁〜五七頁。
- (6) 高浜虚子『俳句の五十年』・中央公論社刊・昭和十七年・二月・四六頁。
- (7) 沼波武夫「俳句紹介者としての小泉八雲氏」『帝國文學』第十巻十一号・小泉八雲氏記念號・大日本圖書株式会社刊・一九〇四年・十一月・一六頁〜一七〇頁。
- (8) 星野慎一「俳句の國際性——なぜ俳句は世界的に愛されるようになったのか——」・博文館新社刊・一九九五年・二月・一九頁。

(ひの・まさゆき 島根県立松江北高校教諭)